倭訓栞中編 久之部 六

和書門	類	三六七二三號	一二三函	一架	六四冊

内閣文庫				
和書	類	三六七二三號	六四冊	一架	二三函

内閣文庫		
番號	和 36723	
冊數	64 (40)	
函號	263	7

国立公文書館
National Archives of Japan

倭訓栞中編巻之六

洞津　谷川士清纂

久の部

くう　俗に空言空事なとをいへり空は漢音なれと呉音にのみいひならへり

くがい　公界の音也又公廨とかけり職田は全く私用とし公廨は官府の雑用とする料なり押紙としるせしといへり一説に公廨今畠年貢といふ国司以下諸役人公廨の内をもて役料に配當す○くがいさうは九蓋草也或は云りさうより出て威君仙也といへり○松岡翁の説に鉄線風車も同様なりといへり

くがれまどふ　源氏物語にあなかのくがれまどふにたちといへり

くがぢ　本朝文粋辨散樂に莫泥於水鳥之陸歩とみえたり毛詩注に鶅渠は水鳥而在原失常處といへり

△くぎ　釘とよりて喰鑽の義なり○新撰字鏡に鋅と門の
くぎとよりて又鐺とくれくぎとよりくるとハ長なり○類聚雜
要に菱釘花釘とあり
くきら　菅家万葉集に拘者羅とよめり名義集に拘者羅とよめり
好聲鳥なり鷄鷗なり翻せり鶉字とよめるとく字なり正字通に
○義玉集に〇〇きれとよめり
くきやう　洞とくきなり〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
つきなりいとも同〇又莖の義なり
くぎうち　撥紙に釘を拾茅抄笛孔に釘打とよめり
くぎぬき　釘貫とかけり関の打貫なるハ柵門とよめ
なり也又つぬきと堅めるなり○釘と校とのことなり漢に釘
といふ也
くるやく　究竟の音也今くつきやくなり
くぎや　公卿ハ三位已上也但参議ハ四位といへども公卿の例也

月卿も同〇〇三方の折ふかくなるハ古へ公卿おハ膳を三方とす
ゐ殿上人ハ足打と用ひるなり名也或ハ借答とかけり
くぎかくし　釘隠也西宮記江次第に見えたり鞆とかくなり
乞せり邪氣を避るためなるべしとなり
△くぐつ　門戸ふりハも潜りて入るなり也○泳宮ハ美濃惠
奈郡なり景行紀に見えた萬葉集に八十一隣之宮とかく
くぐり　括とよめり擂木の義なり万葉集に縛もとあり括
貫のくくりかなりとも同義也○絞とよめるも同じくくりなり
乞せめくくりなるの結衣なり○言葉集に
鷹の足緒とくくりと訓せり
くくり　源氏にくくり袴とかけり括紙にくくりものとかけり
纐纈也とかけり
くくせ　文選に蝸僂とよめり屈背の義也六書故にも曲背也
くぢ　注せり新猿楽記も同じ

くたち　万葉集ニ上つけの左野のくたちとあり蓋心と以茎立の義也倭名抄ニ蕈もあり拾芥集物名ニもあり夫木集ニ蕈のくさもえふくりともあり四季物産七種の一にも入るり

○庭訓ニ雪林菜くたちけとあり公儀ニ公家の義なりやけとあり公儀ニ禁中也ニ禁秘抄ニ於公家殊御祈者孔雀経法也とあり栄花物産ニ公のたくけのたさぎめとうの卯ときとあり

○摺紳家とあり也字新書ニ摺紳公卿太平記ニ記ニあり

○供菅の義ニ以俗産ニ○

くけつのかひ　花山院の時祈祷の献也とあり俗ニ九穴の貝と名者八長年石死とあり仏ニ院其海貝と那智浦ニ沉めたまへ白河帝の時弄潮者ニ祈せしめたまへ経三又許とて本草ニ石決明七孔九孔者佳とあり

△くさき　新撰字鏡ニ秘又穢とあり芸とくさぐさすつとあり

又除草也と注せり今茅ぎとあり耨と訓とあり同韻會ニ穢ハ耘也とあり○草木ハ相通しとあり史古禮ニ男子生而射天地四方其文云東方之弧以桑梓者南方之弧夏木也中央之弧以桑桑者中央之木也西方之弧以棘棘者西方之艸也秋木也北方之弧以枣枣者北方之艸也冬木也とあり

くさぐさ　俗ニ也人ニ以くさぐさと訓ニ物とあり

ちくさもいめり腐らんの謂ニや

くさめ　枕草子ニ物ひて誦文とあり人くさめ徒然草ニよくさめくさめとあり仏ニ休息命の訛音也拾芥抄ニ嚏時の頌ニ休息萬命急々如律令とあり也四分律ニ時世尊嚏諸比丘尼願言長壽時有居士嚏乃礼拝比丘佛令比丘咒願言長壽とあり

くさり　日本紀ニ鎖とあり倭名抄鷹犬乃具ニ鉤とあり鞍馬

具ふ僅とあり俗用鏈字未詳〻〻つ鏈條なるべしつ六書故ふ今人以銀鐺之類相連属者為鏈とええあり即今鉄索とり〻〻いつ因也庭訓ふは鍍とあり又つとと訓せり○万葉の歌に鉄索よりとりつ○軍用よくさり惟又くさり俳諧ふ○庭訓ふ兵庫鎖〻いつを鐔とあり

細ぐさりたるぞいつ〻〻つ

くさや　草屋の義也ワ〻ぶき沢いふ

くさづや　草畧の義也畧〻のつとめ沢いふ也

くさび〻　倭名抄ふ菜蔬とあり日本紀ふ蔬とあり千字文の古版ふ菜とあり草枚乃義なるべし今菌蕈といを倡

ゆ〻〻いつ庚申の紀ふとあるハ内〻行事ふあるを

くさ〻ぶき　馬ふのつ盛衰記ふあるを草脇の義歟

くさぶ〻　鹿ふのんあり草卧の義也詩経の古点ふ跋渉と

くさやみづつくるとあり

くさぐ〻　倭名抄ふ膚とあり蒭藁藏也と注せり日本紀ふ草代物ふ〻〻つ生ふとあり

くさきり　倭名抄ふ剉薙とあり埃嚢抄ふ児戯物の中ふ草薙とあり〻〻ハ馬艸也山口祭ふ書ふ草削一双〻〻とあり

乞也○全浙兵制農具ふ鉏坭とあり刈鍬とあり〻〻譯せり

くさ〻づ　臭水の義本草ふ石脳油也越後國より燃土燃水と献とあり天智紀ふ〻〻ハ村上の城外黒川村ふ方十間餘の池あり其ふとあり三丈餘深さ五丈ふ〻〻ハ油水上ふ浮めり土人ふ〻〻ふ〻〻つけとあり岩ふ貯ふ〻〻いつ大荒戸村礒明村水梨村栃尾村ふ〻〻ハ岩ふ泊り土ハ地と三尺ふ〻〻掘ふ〻〻出て薪ふ代るハ日乾を枝

倭寺泊の色皆赤かりとあり美濃國谷汲山讃岐香川郡安原村ふ〻〻ハ又類ふり○信濃水内郡薬山の産も同〻〻上野ふ吾妻郡

茅津は温泉なり比茅津は具水の茅也〇蛍草は土の油なり茅と類也

くさ〻ちひ　倭名抄に餻をあらきされと艾餻と出し伊勢大神宮は三月三日節新草餅を供せらる儀式帳に八尺多の錦繡萬花谷には草餅とかけり俗にもぢちといふ也（）くさもち貝は越後の海にあり翠蛤也と云

くさのかう　倭名抄に芸とあり茅は香の茅也とて童蒙頌韻

よくさのうてなり〇今茅の玉を呼は白屈菜也と云玉は香と訛もるゝや又びくさは丹毒と云やまひ又行と曲るは妙也新撰字鏡には芸とくさきをつくとあり きは略なり

廢草也と注せり転とくさぎりてはこれきりや伊勢集に

茅のかゝ色かりぬるあはれなるかなれはきゆくさかづゝ　草髪の茅兒戯に茅髪ともいふ今もあり

くさ〻れそゝ　茅の原也源氏花宴に茅は墓なとさしていふ

そて六百卷に合に茅の矛と紙せ〻紙刺に紙武ア行後の矛

〻〻もはゝ〻茅は弥勝のゝ〻は宴の巻は弥に艶なるもの也源氏

ゝぶ〻ゝ行後は毒草なり也〻〻〻

くさまくら　茅枕也旅の頭辞にあり山野に卧せる意也伊勢物語に枕とて茅の結ふもとにあり日本紀に藉草と

くさのたもと　草の袂也常門に云茅は長も同し菅は万葉集

秋の野乃茅のたもとを結ふ如きをいまゝ袖とゝゝん

くさのそやま　草の茂りあるを端山と云隆祐集に云

くさのいとゝ　茅とりの糸と云

くさとりたち　鷹狩の狩也鷺の狩也とりて偏手に茅と

とりてかまとりたる也

くさのいろり　草庵也艸々の体といふまれも同じ　麻蘇
ともつえをもつ○一夜の雨と結ひ　ゆゑ八白樂天ら盧山雨夜草
菴中くいつる句ふ　ともつ俊成々
むかしおりふまれ居の松の雨ふ海ふをく　山かと、きん
くさつゝけどろも　野路とり休ふ　○　俗称ふくさ
といふ草創の工也
くさかりつゝハ　徒然ふまふ日本紀ふ蜀葵とふ蘇
もくさかりくふむ新山牧ふ
清牧野の茅刈笛の童あゆるかまとのくてゆ
○世ふくさかり三郎といつる　永正の比の戦将ふ草刈三郎左為尉
景次ふり用明天皇の餘亂せとふ
△くゝど　公事の音也朝野群載ふ西郷の改ふといふ
俗ふ官ふ訴ふとすくて公事といつる也告也○應仁の求ふ
堂上の法ふ領と失ひ便ふ牛公事酒公事糟公事

ひて賣家と征しく法と納り取ふり盲者の社次と昇ふも
まく金と公ふ豊臣家一統の日堂上の方く其領と領附ふ公
事法の代りとせ法されとまを風て今も久祢家ふ盲者の形
をと聴ふるもあるふりくいつる○九字ときる九字護身法ふし
いて臨兵闘者皆陣列在前の九字ふて大公望の軍術ふ
枹朴子ふ云ふり今佛氏の用とすもいふ
くゝげ　日本紀ふ櫛笥とふり或ハ匣とふり物ふ
げふ云ふり万葉集ふ髪梳とよめるハ義訓也大神宮ふ櫛
笥ふもつる○京師士生朱雀の間ハ町と匣といふ
くゝだ　伊勢の櫛田ハ倭姫命の御櫛と落ふたまひしふ
の名ふ世記ふ云ふ式多乱郡櫛田神社ふ荆州記ふ
興安縣水邊有石櫛俗云越王渡溪隨櫛于此と云ふり
くゝく　日本紀ふ屈とよみ又折とよめり抉と訓連と新
撰字鏡ふ鮎又該ともよめり注ふ鮎ハ屈也断也該ハ折曲也と云ふ

くしがき　平治物語に櫛御笥の宍と折傷也又櫛折とも云

徒然草に囲院の御所の御所の宍と折傷也又櫛折とも云

終日乾也昔の御所の形今の宍とも○鎧にも櫛形あり○

灰を押しくしくしくと云ふ清盛の后もづくしくしくして居

おしたまふようのことと云ふ和泉和泉郡横山峯と櫛形と

云ふ狭衣に和泉横嶽と云ふ

くしげ　源氏にくしげの内ともいへり神代紀に結

髪をみくしげあげくしあり

くしがき　串柿の字法柿なり串に挾て曝乾もする也藝

州西條と第一とす○信州立石にも小串柿と出せり○枝柿ハ

枝に細をぐしに熟をつくしがきにも云美濃の蜂谷と称て

ぐぐ　俗称也愚率くぐれ音ぐと云ふ

くしみたま　神代紀に奇魂とあり奇霊のみたま也萬葉

第に神さひたまくしみたまと

くしみけの　神賀詞に櫛御氣野命とあり神名式に出る国意

宇郡久志美気濃神社とあり出雲風土記に熊野大神命詔朝御

饌勘養夕御饌勘養五贄緒を處定給いつるとや素盞嗚

命とたくしみけ申す号也

くしたま　則子也雑字全書にあり類聚雑要に櫛掃

とあり銀糸金白猪毛なり○櫛枝といハ伊勢に祭に祭主稲

木川の東のくしひぐしの社とあり也其櫛ハ山田岡本なり秋

る恒例なりと

くす　日本紀に樟又樫樟と訓す奇の字也と云ふ

に化して樟脳と出せるものなれと名なる如し古事記に楠とよめる

も同じ所なり也大なるを云ふ也と云ふ香ありく脳なし

豆州熱海来宮の神木小囲十一抱半なる楠なり幹のもとに三十六

人居まして云ふ又豆州本坂越に十四五抱の樫樟なりくすを乃木

の森〳〵日〳〵沢村の木八十七抱あり〳〵又めぐりと呼とのたり
くぞ　葛と訓そ吉野の国樔うり出ることり〳〵名産とたよて
かづらとぐるせ〳〵いつて〳〵多〳〵ハくぞかづらとうり和名抄国
くるぶし　療病の俗語也茅とそ〳〵かるる詞也
くぞや　茅屋といふ葛屋の約也〳〵○貝の名もいつて
くるも　薬錬の約せ〳〵いつて或ハ鼓糸粘とうり又天鼠とよ
うり今松脂小油とまぜて焼るかもいつて
くるみ　日本紀小鏡と訓せうくるひともいつて
くるむ　奇字のことせ松紙の物〳〵くるみて実法なること也
といつて
くるく　琉球〳〵て城といふ或具足の字と用〳〵又きつくよ〳〵ア物
ぜ〳〵ぜ〳〵や又豊見城玉城中城兼城ぜ〳〵いつる府なり○乙未の
復漂船の船頭の名も金城宮城大城等あり
くすハ〳〵　万葉集〳〵えもくるくる〳〵ぎくるや

くるうび　五月五日といふて〳〵いつて貫之集〳〵
ほくきんかけともあるもあやめるまこそくるうびのもの〳〵せうり
くずまめ　黎豆と訓せうり
くぞめき　氏〳〵いふ葛貫〳〵ちうり東鑑小ふる也
くぞもち　葛とうて餡〳〵する也○麪條〳〵ると葛切〳〵
いふ○水玉も葛りて造るもうり
くぞめぢ　山城の地名今のちる谷紙の坂也〳〵いつて苦集滅道
とちうり成實論〳〵苦集滅道四諦品なり
くすりびし　大諸礼〳〵ふる今べかさ〳〵びといつて
くすりどの　庭訓〳〵薬殿壁書〳〵ふる古ハかり〳〵まうり
〳〵ぬし
くすりでて　類聚雑要〳〵薬管入物有四合一合吋梨勒一合挵榔子
一合紅雪一合紫雪〳〵ふる河海寝殿の賢束二階〳〵ハ置薬子匣其下
階薬匣〳〵ふる〳〵多〳〵り○今醫家〳〵ハ薬籠也

くもりげくみ　　藥と包むは古くより法なり○女淫更衣乃入
肉のもりよりはうもやく一かさ○こ汁首とちて又かさ○たく為やく
くそ四方ふ押折てつろはさ〳〵紙も茶包といふと紙
くすりはかみ　　尚藥といつて建武年中行事ニ名
△くせまひ　　或ハ九世舞と也ちなみ職人所合ニも見えたり下学
集ニ曲舞と書セり清少納言ニ今やうれうてくせつきたるといつて
△くそでかは　　日本紀ニ褌ニ屎落ーあと屎褌といふと見えた
多り今河内の捕鯨の里ニもセ○俗ニ屎垂袴といふも乞より起る
ろかへし
くそつくぶくろ　　倭名抄ニ胃とよみ屎腸袋の義也新撰字鏡
ニはくそあくらとよみ肚も同ー
くさひりのやまひ　　倭名抄ニ痢とよみ○赤痢とちくそ白
痢とあり重下とちりかりくよむ後重也
△くた　　愛宕郡久多荘ハ久多の滝久多川ハ

くだん　　件とよみ行ア同ー如件ハ右の事件のかくと
いふ也説文ニ件分也とあり
くさも　　腐藻なり〳〵ー又水もの腐て海人の藻といふ也と
つくれ事ハかくぐさのとよめる
小ゆるぎの渚ニ風のふーよるかくてもおさへ浪もよせくる
くたい　　物ニくんたいともアり名ハ裙帯也官女の肩ニかける礼服也
○まさきけ五節の條ふりそめし裙帯と名ハ月深の義也
くだい　　句題の義三代集の示れ一句とりて題ニ出ると云也
くだいー　　管石の義大和葛下郡巻井川より出て壓石様の物
ニて人立の玉石也此ハ大小百許壷ニ入さる紙三梅のきてより拔出セ
もりり伊勢鈴鹿郡の古墳尾張知多郡社山ともり出セり多くハ
青色也所謂珠襦玉押の品なり〳〵
くたびれ　　疲労のことい〳〵俗ハ也光長卿の示よりもり草臥
の字とよみ事ハとりこハ詩の跋とくたびれとるもふ据出りされと腐

しぶるの字なくし俗に菰字代用す艸枕の二合也演義文に疼
軟なとつかえるの○畿内にはちんぐいひ薩摩ふだらくと云国にか
つくるいとぐちといふ
くぐりやな　崩れ梁ともいふ也
くぐりやみ　下旬の闇夜とする也
くぐりそうで　浮氏ふれのなくてくるしみなくてこうえんとう
西土に降箋といふ
くぐ紙まく　酔漢の多言する時いふ俗語也等と类の糸機
の糸ちりいつ
くぐくし　浮氏おつる日本紀に碎とあり
くくらおや　倭名抄に箜篌と訓せり百濟国の琴なり
ふくえなり
△くちる　打腐とあるくつるもいふ
くちる　疲ふりいふ志餌とあり心餌にはひくいひなり

くちにく　口舌の字あへはあえせはせるなへ俗に口ちひといふなり
いつり御門祭祝詞に相口會賜事無くと名加の口言りてはし
くんとまつる紙くいひ排きて彼の言と相諾なひ給はさるも○
示云に名や水月やなのれのやとくちひのやくいつるなり早き勝
けの辞也
くちまき　口吻といつり口吻瘡なり
くちまめ　多嘴といふ口忠の字也口まつも同
くちぢ　新撰字鏡に嘴とあり口著の字なへし
くちいれ　應仁紀に御墨壺のほ口入とつんとあり今口入の音
とまつり密に紙に雖有礙不能口入と云時口入は西土に
牙也彼風抄に口入料米口入分なとつんとあり
くちびる　浮氏に名也打尼の字也
くちおそ　新撰字鏡に嚐とあり
くちもち　口持の字なり口りいふ也

くちやむ　朝鮮機張の音也
くちまい　俵ふ〜いつ〜口米月とられ〜いつ
くちゼん　漢書に令民産子七歳乃出口錢とえん後漢去れ注ふ
羞口錢也とえんえんより口前も同〜○馬口篠八漢昭帝紀ふえん
くちとり　倭名抄ふ櫳人とあり執轡の義也樂府雜録に櫳
馬人〜えん徒然草ふくちつきくもえん外宮御神宝送文ふ白馬
形一匹云〜口取一人高一尺九寸着冠綾褐布帯紅草衣小綾袴生
下袴伊知比脛巾等〜えん○獅子舞の口執の面ハ王の鼻せれと
鼻と云く造りいか
くちぶ〜　新撰字鏡ふ蚊とあり又蟲とちぶとあり
くちもげ〜　浄瑠璃ふえん老人歯のぬけ〜口のもげりとる伸くと
いつ〜
くちゆがむ　倭名抄ふ喝僻とあり
くちなぶ〜　類聚雑要ふ口脂とえんるえん口脂筥納麝香〜

もいつ〜
くちうつ〜　禁秘抄ふ法口移〜えんより
くちづ〜　古事記ふ撃口敵〜えん
くちひねむ　新撰字鏡ふ咂字とあり玉篇ふ出陀羅尼と乃
〜えんより
くちぞさふ　口蹄のもとせとい〜くちもそびもとり或ハ口遊と
ちり赤盥ふえん
くちとけす　唐書ふ滅口〜えんより
くちごり〜　世説ふ強口馬えんより
くちつぐむ　口箝〜ちり
くちかし　新撰字鏡ふ訥とあり今もあるいえんくちり
もいつ〜
くちおと〜　徒然草ふえん唐實華言若不出世号囁嚅翁
〜えんより

くちぐ〜ぶ　新撰字鏡ニ註又誰とあり今昔物語ニ櫛と
まぶハ心婪ぐ〜
くちごのぶ　瘖とあり
くちもぐ　日本紀ニ漱水とあり新撰字鏡ニ吮字とあり
くちなぐも　口馴とあり家成卿記ニ此式ア日記ニ
人ニまぐ〜折まぬとあり此たまとあるのもの紀ぬそ〜けくちのしゐん
くちきがき　繪ニいハ朽木書の家図畫宝鑑ニ古人畫藁謂之
粉本前輩多寶蓄之〜いまやや或ハ今いハ燒筆也〜いアヒ西土ニ
柳炭ニいハ此邦にてハ杉を用ふ○朽木垣のもとあり後水尾院御製
〜やはみゐがくれのくちぬ木垣さでもんの如〜ちぐ〜ぶ
くちぐ〜ぶ　鯨とあるの舟也爾雅翼ニ海鰍船とあり
くちとたく　万葉集ニ打口とあり塩鉄論ニ鼓口とあり
くちのもぎ　孝經ニ言滿天下無口過とあり○唐書
ニ宋之問有奇才但恨口過注ニ謂口臭也とあり

くちがぐのさけ　口嚼酒大隅風土記ニみゆ使琉球録ニ酒以
氷漬米越宿婦人嚼以取汁曰米奇とあり武備志ニ
ひり芝古への淳素の俗今ハ絶〜
くちづかぐで　法華ニみゆ勅使ていてハ独ぐちみと
のりぐちと同
くちのそにかく　口の端也又掛歯牙のこと也後撰等ニ
あまれてニ事こそ者の口乃そにかゝるやいかにとよみ侍
△〜づち　牛祭文ニあり○癲狂といふ〜つ〜つ〜づ〜
ぎ〜まあり
くつま　日本紀ニ傴僂とあり霊異記ニハ僂とくつせし
まあり
くつこ　倭名抄ニ口籠とあり牛馬の口ニかくるなるやや
ハ篤字と〜〜切韻ニ口ニ大平記ニくつのくちたるともあり

ぐつ〳〵　倍沙也砂石集よぐつとのまれぬはいつり屋の
音うや
くつ〱　倭名抄に屐とあり又くつのしたくろえ
ろう○藁深履〱いもろえろう
くつぐ〱　倭名抄に履椇と訓せり履と告れる乾也○
倭名抄に鵄尾三代実録に鴟尾と訓せり形の履椇に似る
也打花尾と鐙尾〱いろめし分紀に陳舊制三公黄閣聽事置
鴟尾〱ろく蘇鶏に演義に蚩尾水之精能辟火災可置之堂殿
今人多作鴟〱ろ白鶏も同じ人以ちやちわとせ
くつまき　矢足とあり釈名に矢本曰足〱ろえろう
くついし　履石也熱田の神宮にて感得せしものなり其
形履乃如〱璞に似るり紋形の奇巧も彫刻せるる如し〱
野宮の内侍に八玉形物の彩せるもの多し西土のおふ以石履と
はるあるべし

くつびき　倭名抄に卧機とあり足にかけく牽とい也
豫州にて少児の吱喘にてひいく〱ひいくつびきたぐりとい
たぐりハ古ふいたぐり也
くつち〱　新撰字鏡に踉とあり履とろる也
くつかへ　顛まく覆とあり崩及れ物下し覆ハ音ふて又
おちくの時ハ音ふかり新撰字鏡に娑婆又戯ともあり
くつかり　行の体ホリ人沓冠せたてせられとのもとに毎
句の上下ふ置て先冠とろみは後ふ沓とひハたきものろとる
ろろ沓たつひてろろ沓ろみるハ又一体にして毎句沓冠とい
くくくくも也
くつかひ　くつかのと山田つくりかひてとたきみてたれもや
くつかひもの　雪の元にてろ沓にてろうて沓と投るふ似る
と喩へいつり見雪の河也ろて沓と結ふ〱いくくく
くつのかろ〱　沓の時板の家大内の様也〱とり

△くでん　口傳の字朱子文集にみえたり
△くとう　句讀とかけり句ハ一句二句の義又矩也同し讀ハ去聲音豆或ハ句投とかけり語の絶る処を句とし其中のきるゝをとむと讀といへり○句投を也アとちがへるを破句といへり
○くゞこうひ　日本紀靈異記に婚をよめり組貫の義にてくゞのゝを省きぬとかしきとうひハ延たる也互に手を交へ抱く意といへり○再嫁の婚を二婚ともいへり
△くふさ　万葉集によみたる國の体を示すことばなる也今も出雲にふさと名付ることの多し○みちのくハ奥州也
くもん　公人とかけり禁中の地下官人をいふ
くにがへ　西土のむかし移封といふ也今も諸侯の国替也○古へ名替國替といへり任人称非本望不賜任符更任他國謂之國替
くにまぎ　神代紀に見國此云矩貳磨儀といへり○古事記に乃求につまぎかへるとなり

くにいへ　國家の義日本紀に宗廟社稷をよめり義訓也通鑑胡註に東漢謂天子為国家といへり
くにがた　日本紀に国形をよめり祝詞に國体とかけり○萬葉集に國方とも見えしハ借字也
くにぶみ　新六帖に出たり清綱をよめる也国文ともあり
くにちゝ　万葉集に國原といへり天原海原などいふ
うかし
くにつみ　中臣祓詞に國津罪といふ天津罪にむかへていふ也古語拾遺に國中人民所犯之罪といへり
くにつかみ　日本紀に國神とよめり又地祇をよめりつハ助字也天神に対していふ也地下の齋にいふと地祇ともよめり今義解にみゆ
くにのおや　源氏に見ゆ母のさまにいへり
くにつやしろ　國社を日本紀によめり又祇字をよめり

天社にむかへていふ也

くにのみなか　中臣祓詞に四方の國中と云ふみなかは真中也此以下は神武天皇このかた皇孫命の御代とせられたる万葉集人麻呂の長歌に神代乃事といふを略きていひつけたるなり然れど似たり彼は今此は文なりし功にいへるは倶に用

くにひきます　出雲風土記に國引坐八束水臣津野命云々

ことくに　又あくにおなし

くにつみやこ　國都といへり○くにのみやこは久邇都とあり山城国相楽郡也後に恭仁の字を用ひ瓶原宮と改めし也

くにあてまうしたり　北山抄に國擬とあり

くにのそきたつかきり　祈年祭祝詞に国の退立限と有云は土にいふ同し退立は遠放（トホサカリ）云也さしもしく音通ひかり及きなるをいふ也故に退（そき）も相通へり万葉集に天雲のそくへの極又天皇の遠隔（サカ）の極しかはそけのけと通くそくへといふに同し

△くまそバ　東都の方言也苦麻臺をいふといへり

くましし　深山にすむ獣くましゝはむかしより人の心やふりことおもひて又るまきくましきまゝをさそふたまへり或ハ町畦の事によへり

くまりみち　俗に羊腸といへり

△ぐのめ　米の五ゐ目也

○くはな　伊勢国桑名郡桑名神社二座あり延喜式姓氏録に桑名首天津彦根命男天久之比乃命之後也とみえて又子二神を祀れるにや多度神社も姓氏録に天都比古祢命子天麻比止都祢命とみえたる天目一箇神也額田神社も姓氏録に額田部天津彦根命孫意富伊我都命之後也といへる是也といふ桑名神社は今いふ社は春日と称す社家傳習の説に左は三崎神社と号す建雷命齋主神を祭る右は春日の神社とす天児屋命姫大神を祭るとし云奥御前は母山神とも称して地主の神也とぞ

くハや　倭名抄に器物に銚子くハやとよめり
くハへ　倭名抄に釜鬵とあり文字集略に鍑は大字なり
文り　鍬山神事あり雑例集に元禄癸未の秋美濃国恵那郡神野村に鍬祢と称て上州
高崎に移せりと　大祢宜祢田の祢宜に用ゆ　榊
して造りそなる鍬形を師戒に贈るを愚民祢のことく
崇めそなへ也明和丙戌の年尾州に起りて
遠参に及りて八月朔日に大火地震津波
の変あり明和の年八尾州洪水して遠参に及り神躍りのこ
とを用ゐ不祥の例也風俗通に鮑君神のことを載て傳曰物之所
聚斯有神言共奬成之耳とこれなり
くぢ　公方の号ハ鹿苑院の時應永三年に始まり此時久
神祭に伊勢両院乃別當と兼帯し源氏の長

こと也とあり　太上天皇の号ハ延喜に始まる　嗣子
義持固辞して受たまはず　太平記に高氏及義詮に公
方と称せしなり　○公方勘文貞信公記に
くぐん　的の射に九半に切り小折敷に九に切てそなへ
用ゆ
くハぐり　企字にあり　際立のこと
くハぐ　曽に鍬形の物也古俗お侍へておりぐるの
の冠けぐるよりかさねられし蝦夷人の寶にする鍬さ
きに形あり仏にそなへ災とする也
鍬形中に里に鍬山の祢宜　○伊勢飯高郡に
くハゆ　馬に乗り倭名抄に烏頭とあり辨色立成に曲肘

くばんだ　　梵云ふ鳩槃茶とかも世ふ醜女の形を称せり

○一切経音義ふ此云陰嚢とかも狀如冬瓜行時繫置肩上坐時卽便據之由斯弊狀時異諸類故從此為名とかも頻疝の症也

くハさき　　蝦夷ふは医薬ふ此とりて祈禱を甚験也鍬の柄ふれる如くまりふ巴を彫入るる或ハ義経の曽ゝ鍬形也とかも

くハのかど　　素つの文字をもかみ也夫木集

かゝゝゝして入ゝハ行を素ゝかどそのんよそのもるゝ

△くびる　　新撰字鏡ふ軛又軥又衡とかも軛ハ倭名抄ふもつぬえるり文選ふ榻とかもあり頸木の義ふや○越後国ふ頸城郡ありて武ふ奴奈川神社大神社あり古事記大己貴乃神ふ高志國之沼河姫のもとふ通ひ給へし

ぐひん　　世ふ天狗のもとかゝゝも名くるハ頻那夜迦の訛如ゝ

りて天狗の狗ふ頻那夜迦の頻とを合せ呼なゝし或ハ狗賓とも

ゝて天ゝ狗ふ賓の名もかもつて

にゝもとは公賓の名もかもつて

くひかめ　　日本紀ふ癬亀とかもり人の名也

くびるさ　　車の具ふ頸総とかもり○餝馬の具ふもるる

くびぐさ　　頸牽の義技河之戯とふ留青日札五雑組ふ見ゝ

くひぞめ　　中山傳信録ふも六月有月之夜士民皆技河爭勝ゝ

くひつゝ　　初生の児百廿日めふもるる也餅ゝ小石二を用ゝ

るる也春盤ハ杜詩ふ見ゝ　　春盤とふ喰摘の義蓬莱飾ふも也とハ凡春の

くひもの　　食物の義今音もいふ西土も同ゝ

くひあるせ　　庭訓ふ合食禁ゝもるる相反ゝ物とハ

ふ食合もるる也

くひちぎる　喫緊といふ喰縛ける也日本紀ニ切齒とこそひ
ちぎるとよめり
くひそげむ　新撰字鏡ニ齧類とあり切齒怒也と注せり
くひちがへ　齟齬といふ咋違の義也
くびれわひ　倭名抄ニ鞦韆と訓せり車牛ノ具也
△ぐふ　具否の字也建武年中行事ニ上卿陣ニつきて弁と
召て諸司のぐふと問ふと云々
ぐぶ　供奉の字蜀志ニ云々
くふう　功夫又工夫ともいふ伊藤氏ノ説ニ人夫工匠の
事也近世平生の口語ニ事と思案するを工夫といふ大ニ弁
義ノ乖けり思惟工夫ともいふ倍もつとも思惟もる工夫
といふなり思惟のてまをいふなり○後紀ニ淡田郡
堤決發單功築ふとあり單ハ盡也役夫を尽して雇ふ也
單功といふなり

○くへ　食らふの略語也
△くべと　神代紀ニ洟田とあり洟也今も子
乃名ニ窪田あり古事記ニ下田ニ作る
くべがひ　窪貝の義嘉定貝和ニ第ニ
いさやこゝ造ひ〳〵でにくべがひもたいまつくべけつこの祢
くべがりもな　舟繋ん料ニもちふる也とあり杭抓の義ヘし
○くま　熊ハ一處ニ七日ノ居とある也穴ニこもりて冬ハ
かせをさけて含てちゝ深ク入て後みづきニのぼりて七日居て腹
とかして穴ニ入ニ牝牡一山の裏表ニ隔て住て林の彼岸ニ春の
彼岸ニ出り穴處と其處と數丈多猟りぬと穴ニ知て多
く集りて小便をそそりて獵人を毒ニ殺て大ニ呼て戦んと求む
毒ハ必ず出ル敵ニ多寡と顧す又牡熊とうつは月輪とあるを
牝熊とうつハあメセハ又熊胆社ニ云ハ寢ル木と多く折しき後
ろとかくひ卧ヒのこるを力の床のやうニ云ふ四ヲ刻ニ大木の

くつろぐ住もりとの膳も性劣るとして○近江国賀郡の山中
にて産婦熊ゝを養育せられ後ゝ擅人となつて其穴と教へて害
ゝ多くとも事なり又美濃の伊山にて云十云部の伊木の下ゝ
一穴とゆうせりゝ樹ゝ熊ゝ二つおりまして其中分抱ゝ栗代りて
飢と養てゝ時ゝ出熊八木ゝ行ゝ途ゝ擅師ゝ逢て物
伝せゝ熊ゝ伝と追まて裂殺ゝ再ひ右の木ゝ上りて撃
ゝも近年の事なりし○紀州の羽の石ゝ熊の丸やきゝ黒やきや
労症ゝ用ゝ

くまの　熊野ゝ出雲紀伊丹後ゝ

ゝ多り舊書紀ゝ建速素盞嗚尊と坐出雲国熊野杵築神宮
矣ゝ心得ゝ但ゝ釈の説と同ゝきゝや出雲國造神賀
詞ゝ伊射那伎乃日真名子加夫呂伎熊野大神櫛御気野命国作
坐志大穴持命二柱神乎始云ゝ素戔嗚尊八熊野
大神ゝ神名式ゝ意宇郡坐神社名神大ゝ考ゝて神祇令

義解ゝ出雲国造齋神ゝ天神也大穴持命八式出雲郡杵築
大社名神大ゝ考ゝて今ゝ出雲大汝神ゝ地神也釈ゝ
杵築大社八父子の鎮坐也ゝ文徳實録ゝ出雲熊野杵築両
大神ゝ○紀伊熊野三神八崇神帝のゝ本宮と建ゝ伊
弉冊尊速玉ゝ男事解ゝ男也遊跡記ゝ五躰王子四社明神ゝ
八ゝ三神の外也三山ゝ社の体異ゝ○新熊野八愛宕郡今熊
野村ゝ百練抄ゝ應保元年奉遷熊野神体於新社今熊野ゝ
ゝ○琉球ゝ熊野大神と祀る者多ゝ波上の社洋の社葉
那の社普天末の社末吉社等也ゝ平判官康頼丹波少将成經鬼
界ゝ流ゝて熊野の社乃ゝ山ゝ日ゝ参詣せゝゝ

起りし歌

くまの　芳野集ゝ隈向まゝ阿回とゝ

くまの　まとかゝゝ

くまみちゝ　ゝ

くゆり　古事記に訓分云久麻理とも分賦の義賦とく
ゆりとも同じ
くゆで　鉄格の形なれば仍て也或は撓鈎と訓せ
り○馬蝗とも云
くまとり　阿新とも中納言藤資朝卿平高時の為に使渡
殺さる其子阿新年十三其仇本間氏を刺殺して出奔し資朝の
の子徒然中に記せり三條其乳母の清潔なつ母其刑に就
や偈を作り阿新に寄せ又見處なり阿新後邦光と名く京に
還り官中納言に成り家を阿野と姓す
くはつき　十文字れ滄乃めく長二尺ばかり三貫目余り
り新後宮に銀とも云
くまがひ　所の名及氏姓に熊谷とあり加ひの訓日本紀に
也峡に同一説に武州足立郡也○くはかひさゝなり熊谷寺也
二説ふに出く如文貞に仍てなり又ばつとりまなりかゝぎしまに

仍てなくまがひの如く熊谷れ直実と平の敦盛と一谷の戦
とりて名くなの形ちなる也藜蘆の種類なるべし
くまごり　三代實録に聖徳太子建平群郡熊凝道場元亨
釈書に推古天皇二十五年営寺熊凝村熊凝今額安寺也と日
年紀に元亨式雲甘寺坐檜本神社なり三代實録に平群郡
雲甘寺と云なり梨本已郡尾邑なり野馬田明神なりと云
くはくゝ　出雲風土記に乃西隈いきの義也
くまのたなごゝろ　熊踏也熊八歩て木實とぬむ五穀の内
八栗のくゝ食なり何とも云まじ掌に受けて後に食す蟻蟻
尤海魚と嗜むも亦然つて穴居の時掌と舐て甚肥と云
〈くゝみのと　拾き集に組の結也
組の下結也
くゝみゝさ　車の具に組総とあり
くゝみがき　組垣也八重のくゝみがきとあり日本紀及祭主輔親

の字ふるえてゐり一説に隠垣のごとせしいつ
くみうち　武術にいへり組て首を撃也新撰字鏡に批とも
ひくくみてすくくもあり
くみてしる　物とお通りに彼此組合せて初の義也言多く
汝に劣てしるあり
くみをのかく　呆如あやふくくみをの祈るもるこゝろ宣旨
とゝえゝあり
△ぐんぶ　軍賦也尊氏の法令の守護にて五十分一の軍賦と
輸さしめ武高経の執事ところに及んで更に令して二十分一た
らしむ元にうつて望みと諸将に失ひと異本太平記にえ頼
朝の時乃兵糧米なりしや
くんわ　勲位とは軍功をふるひて位階也○神社に又
八軍勝と祈り賽の時に奉る也○神皇正統記に上古に勲功あ
ればこそ官位と進むるはきこえて勲位は一等より十二

等まで有り後の人おれと勲功ありて一等に位は正三位の
下従三位の上つゝ多くしてこれを多くしつ
くんも　裙子とも上に袴形ときは裙ときは也庭訓に
八裳とも律令に用ゐ
くんだの　今世郡代とは八古への郡司のこと
ぐんかく　軍学也今軍学は天武十年に陣法博士と
をしへたえしこと也
ぐんおやつゝ　實盛の誌に云ふ也付の言葉と也
ちうもくんでなりしは也又組に出ぬ
△くめん　工面とは工夫の面目とは
くめまひ　久米舞也神武天皇の時菟田の弓末とつゝ
来目歌と名け今楽府奏此歌と云後世絶
△くも　新撰字鏡倭名抄に蠨蛸とあり俗に蜘蛛と云
夷の毒矢にも用ゐまたぐもとも花蜘蛛也女郎ぐもとも絡

新婦の称も同じあまぐもハ土蜘蛛也くさかふしすむものハ草蜘
蛛也ひらぐもハ壁錢也○蜘蛛網をはらり蜂ならへて羅(カヽ)りし逃
を去ぬ躄くなりて大蜂を将らし數百の蜂を引卒し来りぬ然
蜘蛛を求むれども隱れてみえぬ其處に蓮池あり一蓮葉に纏つれ
みて毬のやうなるを得て蜂起て集り螫てありとも網のやし然さり附
に日を経ぬ群蜂まさに去りぬ人行て視るに其蓮毬を減らし内に
蜘蛛上下より糸をさげて空中にかゝまれり蜘蛛乃字智
誅のこと也と釈せしも宜なりしをやなかに人撃て地に落せしに悉
く脚を収めて死せる状を示せどもまた觀つべし
くもつ　徒然草にみえ古公物とかけり
くもづ　伊勢国一志郡の邑名源顕兼卿高師泰戦于雲
津川敗之と難太平記にみえたり
くもん　後漢書に莫肯公文とみえ朝野群載に山城國公
文所美濃国公文所などいへる也田所の結解とかいふ也といへり
○鎌倉の公文所ハ即問注所也
くもすき　雲の透かげといふ也
くものそ　雲の端也そのそ袖なとしもいへり
くもわし　雲脚の臺ハ禁中院中へ捧る物の臺也遵生
八牋に雲板脚とぞみえたり
くもみづ　雲と水と也山水なといふがごとし○才ハ雲水乃
ようしよめるハ行へさだめぬに譬ふる也西土にも世をそ人を雲水
客なといへる也雲水にみをもと同じ
くもみち　雲居路也雲路ともよめり里程の遠きをいふなし
くもまひ　蜘蛛舞の名代醉編に肉飛仙事文類聚に上竿
奴なとみえたり
くもかさ　餝馬の具にいへり今音にもよめり雲形也
くものい　蛛の糸也くものすハ蛛網也
蛛のいにあれたる駒ハはなつとも二みちかくる人ハたのまし

くもみぐさ　新玉集ニ雲見草ハ棟トイヘリ

くものつゞみ　雷トイヘル雲の鼓也

くもはかし　雲のりつゞひてその如くなる風ヲいふ

金葉集ニ

玄々のぬきくゝ所ん山さくら　そのかゝしれ冠の枝ぬく

くものはかひ　万葉集ニ山ちもつゝひてもあり玉ノ葉ニ

夕りやその作ゝひとことつてんゝハの平坦なる後りなりも

くもわさゝ　人丸橋ともいふ吉野ニ在リ　新玉集ニ又ハ

多り彩葉集ニ　後醍醐天皇ノ野乃行幸おもしゝ　久ゝ付

宮井のさゝ　ゝ

ゝゝもそのわのさゝ　涙ニそゝりたゝかりそのの宿とちりつゝ

くゝものかけそし　長恨歌の雲桟とゝり行ハ雲の薄霏貞

と桟ニえたゝゝ

くもちゝぬわら　不知雲々ゝ洞とゝ

くものうゝまひ　古今集の序ニ行ゝ又也蜘の舉動也ニ

て日本紀ニハくものおこなひとゝ又ゝ多り社せこゝくゝさゝひゝ

とゝみたまゝハ陸機詩疏ニ喜母此虫來著人衣當有親客至有

喜也幽州人謂之親客亦如蜘蛛為羅網君之是也ゝ又ゝ多り

その之笹ゝふゝあゝハ弘長元百ゝ

風さゝをのうゝまひたゞかゝでかひゝまゝゝゝ夕之のて

ゝゝものくゝびゝ　雲上人也朝廷の仕ヒとゝ宮客ゝも敵上

人ゝも移せり雲客ハ六朝文ニ又ゝ史記ニ不意君能致於

青雲之上○琉球ニ親雲上とでいきんと称て官名也

くもゝゝゝぶくゝ　万葉集ニ又也仙茶とゝ淮南王の故

事也

ゝゝもきゝ乃ゝ　蜘蛛斬之太刀也鎮守府將軍源滿仲異

邦の鍛工某ニ命して造ニ其子頼光蜘蛛の妖と斬アリ名く

後世故ありて熱田の神庫ニ納ひゝ或ハ此吉光の刀ヲて平

信長永祿三年願書に副て奉納ありしもの吉光が国吉の才子蜘蛛切の作なるべしといへり宗匠行平の以上数十口あり

△くやび　續日本紀の詔に悔備賜比和備賜比とあるも

くやつ　宮治拾遺に云ふ也今こやつとよめり此奴の義也物

してこいつともいへり又きやつとも

くやく　○供養の音也北史に又○供養法のことハ佛氏に又也

三密六度の行法といへり

くやく　悔の義物にてくやくとも云へり○くやくと祟たれ

ども人ハ本こゝろやくの義也とこゝろ

△くえく　九曜也本命星にて人の形と云る星也にて祭る

ゆゑ又北斗の七星に金輪星妙見星と加る也史の天官に北斗ハ

九星也二星ハ隠也とくえくとこゝろ○車の繪乃九曜乃星

ハ葉と丸くかるゝもの也ハ葉ハ青蓮也乃ハ葉と描く也

△くらす　暮るれ義消日送日なくいとなく如一古今集に

義の中にあひくらんとて物つくるゝ雪ハ降んとも降

くらめ　新撰字鏡に瞻とあり暗冥の義なのくらきといふ

くやぎ　雑俳はハくめふれくはく毋ハつく釜の風乃ちりあなきは

其根香木なりしハ禁中にもありて加茂勅名と称ありといへり

くもろ　貞観儀式に倉代十輿と大嘗祭の條に云へ後紀

に倉代物五十荷と出雲國造奏神壽條にあるも倉ハ座の義代ハ

実れ義也

くのこ　倭名抄に倉撥とあり切韻に従木者布散也といへり

くかけ　篋と云鞍懸の義なり上馬交床にもくくたり

○篋馬と云ハ譬ハ木馬誓古と云へり我国策に諺曰以書為御

者不盡馬情とあるり○倉懸城ハ美作国也

くしき　倭名抄に鞍褥とあり俗に云へハくしきとあるも今

れ馬氈せといふ〻〻挑花藥兼飾物なれば表敷といふなるべし

とゝり

〻〻ぐ〇　日本紀倭名抄に鞍橋とあり又日本紀に鞍瓦

後橋〻もて〻〻ぐ〇のもづ〻らぐ〇とあり今云前輪後輪

せといふ〇貴人に献ずるは白橋の鞍せといふ庭訓に料鞍橋〻

以ハ召料の〻〻つがせ〻〻

〻〻かく　應仁紀に倉方も地下方もとゝゝゝり又倉役〻

〻〻もゝゝゝゝ

〻〻むろひ　倭名抄に鞍帕とあり延喜式に鞍覆とあり

大法礼に天子ハ熊の皮公卿ハ虎の皮武家ハ豹の皮毛氈ハ大名家

鹿の皮ハ通法也〻〻〻〻り庭訓に麞も〻〻六位以下に禁ず

〻〻わのけ　神代紀胸に餌とりて〻〻らげ〻〻わの毛

〻〻わかぐ〇　大神宮式に位金と〻〻〻〻手代次〻〻りて

花形径各三寸と注せり今以て扱金〻や

〻〻れつかさ　古事記に藏官と〻〻〻倭名抄に大藏省とあり

ほ〻〻れつかさ内藏寮とあり〻〻ちの〻〻つかさとあり〇内藏寮

の膳を掌る〻〻ハ今式多に〻〻〻〻〻〻西宮記に内教坊妓女

奏糸竹の時内藏寮侍臣饗を設〻〻〻〻〻〻拾芥抄に正月一日

五月五日七月七日多に内藏寮酒肴を進り十月亥日餅を進る

〻〻〻〻〻〻〻〻

〻〻わのきぬ　位袍とゝゝゝ也

〻〻おつ〻〻ひま　日本紀に鞍馬とあり〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

朝野群載謹上奏山府君郊祀小鞍馬十二疋勇奴三十六疋とあり

勇奴ハめつ〻〻

〻〻あとかつて　源氏に〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

〻〻〻〻せ〻〻抄あふ〻〻致仕ハ官を辞して位を辞せん罪〻りて官位

と停め〻〻〻〻ハ別の〻〻也女文〻〻〻〻古事紀後紀〻〻〻〻大臣

の位もつくて官と位といふもとも古語也

くゝわみどかさ　源氏に見る西位の卑きもの也

◇くり　栗子名つくるに色の黒きと丸くやゝ又くりハ稜角とゝ

ゝて三稜草とみくりと訓て石竹とも同じ也大和の山田村又西

ゝ柏の木ゝ栗子に似るゆゑあり　新猿楽記ゝ丹波栗とゝ見へ今

もまゝ大栗とゝ出せり　庭訓往来ゝ宰府の栗ゝ云り今も多し

七度栗ハ伊豫ゝ出る年ゝ七度みのるゝゝ三度栗ゝ云年

ゝ三度みのる常陸茨城郡稲田村又野列及越後ゝ有り　○松平淡

路守利次の家臣奥田某富士ゝて造化の事と監せしに栗の九

木長さ一丈ゝ大さ五六寸まり有ゝと云ゝ割てゝゝ其内

ゝ良哲言の三字彫ゝて有ゝ如ゝ事珍しゝ奇ゝて一方ゝ

左字に見へたる如ゝ西まの古ゝ出せりゝゝ

くりげ　倭名抄ゝ騮とあり栗毛に黄騮ハ赤栗毛也

紫騮ハ黒栗毛也ゝいつり新撰字彙ゝ騮とあるくりげゝ有り○

紅梅栗毛　柑子栗毛　縺栗毛　姫栗毛　栗毛かくゝ栗毛等の品有り

くりまん　露盤九層とゝて俗ゝ九輪とゝ云り東鑑ゝハ空輪

とゝ見へたり○香合ゝ用ゝ北鄙の制也ゝ○三條院の

山陵舟岡の北に麓ゝ有り五重の石塔有りし代千利休其九輪と

丸て已ゝ塔とゝ聚光院ゝゝ又塔の穿ち窟あるゝと手水鉢

ゝ後桜町ゝ利休禍ゝ有ゝ○九輪草ゝ呼ハ七

重草也

くりだま　軍中ゝ人数とゝ知るゝ如ゝ云ゝゝゝハ縁の義

くりやゝ　松平紙ゝ延喜式ゝ厨女の義みづやとんか

の義みづーとんなゝ如ゝ云ゝ

くりでら　日本紀ゝ皇ゝ云ゝ涅槃の義也○くりゝ云ゝ

も同義也

くりかた　カゝいゝ栗形也ゝいゝ屈輪形の義也ゝいつり建

武年中行事ゝ柱のくりかたとゝ西第のくりかたも同義ゝ山形

洲濱形ちいさきもの　鐫の義也　ハあしび○ぐりの香ばしき屈
輪の義也とかり

良基公の小船のそさひを小船のくりくりとかりかりとかりかりとかり今これくりとハ何も是よりや

越中國礪波郡の山乃名也　熊野の大德神融和
尚山にて俱梨加羅不動明王の法を修せしより呼てとかり○
くりかりやきとハ鯛のひきくりくりとかりかりのすや

後多羽院の時代にハ元連行の上洛ハ桂本の瓦
と名付られ又ハ栗本の瓦と名付られ行きくり小袖
寢具にくりかりかりかりかり

幸返せの義也下書とくりひろけてとくりかりかりかりひろげ

徒然草に案の上下書とくりひろけてとくりかりかりかりこやま

栗の山とかり栗隈山也久世郡栗前野の上方に有
くりかりかのくつ　烏皮舄とかり今にくりくりハ黒

の義也

△くるまと　日本紀に栗林とくるみ乃窠集に栗栖とかり日本
紀に攪食のくるまとのひ乃窠集に指進乃くるまとしいかり
くるまハ刺突の義くるまハ栗巣の義いぐるまし又指進ハさ
くるまかくるまとむくれハ刺墨のくるまとひかけくるや倭名抄
に笠とナみさと訓せり○栗栖首ハ王仁の後也姓氏緣に西○
西宮記に田原御栗栖長山槐記に田原供御所献甘栗三十籠と今
綴喜郡より例貢とん

くるまと　廓とかり轉回の義也下曲もとかり鄉曲也とて
考通に曲輪とかけり
くるめく　くるくさし音韻通せりとて訓紙に五とくるめき
くるくるり
くるまき　絞車とかり轆轤も同じ太平記に搦車とかり
くるくる　天智紀の童謡に又也苦しめ也

くるいと　　綜系の義也通村々の行ふ

このころの日とおもひたるくるいとれ也きさいとくん日ふ〻沙也と

増一線の功乃故事とし〻ありうこハ歳時記に唐宮中以

女功授日長短冬至後比常日増一線之功と云へり

くるぶし　　俗ふ踝と以轉節の義也

くるめる　　括字ハ古ハ括字ハ也

くるまゝ　　車寄乃義殿上の北に俗に以言関也といふ

一書ふ天孫ハ御車ふ乗ゝ給ひたまふ也上古ハ天子の外ハ曽て乃ふ

近代内侍等のあきなひに於てす得選ハ行幸乃時内侍と同車も

ふ不得止ゝてまゝ於此所乗ふ

くるまぶね　　車船の義左右に車とつけ水と搔て舟とやる也

めくりさあり〻この陸乃車船ふ〻沈船の日数なり

くるまどい　　徒御とゝあり周礼疏ふ以輓人乃

くるつかた　　朱ふ也

くるまが〻　　榜の字ふ以八重一重一株に用ふとあり

爭ひ乃比ふ乃ふ也と〻〻〻　　ものゝ東紀行ふ車ゝ〻〻ふ以重

といふ〻ふ浮橋乃ふ也さきゝ也林氏東行日録ふハ沼津也と〻

くるまがり　　軍家ふ〻〻〻乃頼義經一の谷ハ軍乃車ハ

也と古人兵革異論ふ〻〻〻

ぐらんてや　　卧蘭的亞ふ〻〻〻歐羅巴ハ内也

くるまはこ　　倭名抄に車箱と〻〻〻

くるまのあみ　　同ふ罩と〻〻〻

くるまやぐら　　海人藻芥ふ大臣家ふハ車宿乃〻〻〻九柱ハ〻〻

〻〻親王家同ふ名家以下月々ふ容の亭ハ車宿の柱ハ四方ハ〻〻

〻〻名門内の側ふ輿車ふ〻〻〻西とふ也伊勢西宮ふ車宿殿乃〻

〻〻古記ふ〻〻

くるまのこしき　　倭名抄ふ載と〻〻延喜式ふ轄と〻〻〻腰

木の義加〻し抄に俗云筒と〻〻〻

くるまのかなぐ　新撰字鏡に輔とあり
くるまのかなぐ　倭名抄に車蓋とあり
くるまのやうと　倭名抄に車蓋とあり
くるまのかなもの　同書に釭とあり或かりしも以
くるまのもどれ　同書に幌幔とあり俗云車簾とある
くるまのあと　同書に鞦とあり車尾
くるまのくさび　新撰字鏡に軔又軛又轄とあり書
くるまのくさび　鋼とあり
くるまのとがくる　薛廣徳の故事也七十の齢とゝとゞ了
季經
人うさにかけ車をひきつゝ老らゝ心とそやな
くるまのとあるゝ　万葉集に西土の古に七月六日に成る
と洗車雨といへるこゝろなり
くるまのかゞめち　車長持也長持に車とあるゝ也

くるまのうゝ　楞嚴經に苦海仁王經に苦輪海とある
くるまのそりきみ　倭名抄に軾とあり俗に以前板也
くるまのわぶゝづの　同書に輹とあり唐韻に車脂角也
くるまのあぶらつちなゝひ　万葉集に八軸脂也軸はなぐ也
脚といふ也　同書に乘泥とあり○世説に車
△くれまつ　淡拾集に搏れ松
くれぜゝ　倭名抄に牙床とあり又八吳の義也さゝ八吳音
記に吳床とあるこゝろ也吳床とはゆかとあり胡床と同
ゝ得こゝろ也
くれたゝ　推古紀に吳橋とあるより今の唐橋也○松屋
紙つれあるこゝろ也のるに八博楷にやうわに樓にのり
なまふくきはゝのくれたゝ八色ゝの木とまぜゝに造りてこゝ

[illegible]

くれつゞみ　倭名抄ニ腰鼓とあり　くれハ呉の字也

くれこゝ　賀茂保憲女集ニ[illegible]

ぐまん加つも　俗ニ也紅蓮ハ地獄の名ニ[illegible]

くまのまゝび　推古天皇れいゝ[illegible]ニ呉ニ真鉏[illegible]ニ釈ニ良

鉏ニ名也ニ[illegible]

くまかわのふで　詩の形管の字也金葉集ニ内大臣ハ小大進

[illegible]

くまかわのゆき　仙家ニ紅雪紫雪の名あり

ハまかわのちり　紅塵紫陌ハ都會の地ニ用也

くれなゐのはみゞ　血の如ニ[illegible]ニ揚貴妃

ゝ故事ハ古今集ニ

白ゐ[illegible]ハ[illegible]

くれなゐのはつゝ　紅ハ振ハて落る物ハ[illegible]

つゝ　○紅ニ[illegible]

も同ニ也

くれなゐのつゝみ　紅霞也枕ニ夕日のつゝみニ[illegible]

△くろゝ　[illegible]ハ黒ニ也[illegible]

ハつゝ也　野ニ焼る跡ニ生ニ[illegible]

くろぎ　黒木の事京師の薪多く此ニ用ル八瀬大原ニ[illegible]

出ル○黒木の国ハ隠岐ニ海部郡別府村ニ[illegible]元弘二年ニ後醍

醐帝播遷のはすゝ[illegible]

ゐの鳥木也ニ[illegible]○琉球乃至木ハ大明會典ニ[illegible]

○机以擔木葉付机等脚編葉數面編葉者横撓葉以數之案面也

ニ又ハ愚昧記ニ机面編弓弦葉數ニ[illegible]

くろめ　西行ニ[illegible]ハ嫁女の移ハ[illegible]内文年中行事の[illegible]

〇海魚の名をいつてゝ名をとゝ
くろめ　くろめ　くろめ
くろめ　一斛粟春七斗米為糲と云也又糙米とも
粟八斗米せられバ三斗づゝの春米也糲一斛春為九斗
為糳と云ハ一斗づゝの春法也　糳ハ米一斛春為八斗と云ハ二斗欠也
〇粔籹ハ皆白米の名也〇神宮の黒米供ハ左傳桓公の所ゟ餐食
不鑿とあるを也
くろまめ　神賀詞ゟいづべ黒益と云ハ厳斎の黒くなるハ
△神供と炊きて煙と薫ひて黒さの日々益と云也
くろまめ　黒丸の城ハ越前ゟ也
くろがね　鐵と云ハ説文に黒金と云ハ本草ゟ鐵與金銀同
一根源也と云ハ黒くろぐろの木ハ冬青也くろぐろとも云
又くろがねハ実ハ實赤し倭産多し〇近江淺井高嶋二郡
鉄穴後日記に云ハ〇四時祭式ゟ搶鉄鞍の三色ゟ鉄ハ鉾

の料也
くろつち　倭名抄ゟ壚とあり新撰字鏡ゟ黒もあり今く
ろがくとい〇黒地川ハ美濃也顕家の師泰と戦ひしゟ也
くろぢう　畔塚の家基の山田乃くろ塚かしあり古へ塚とも
くろくひしゝやそのあゝ〇一所の名ハ拾遺集ゟみちの
くにあぶちゝ系れくろづゝとあり或ハ黒塚しかり名とも乃郡也
くろがゝ　的の黒星也南齊書ゟ烏珠と云ハ〇西土ゟ
紅色と黒ひかるゝを紅心とも云ハ武ゟ云ハ内院も也
といふ
くろだな　黒棚とあり厨子のあるハくろやぞなの形也
故に侯家の婚礼ゟ用ゆるゝもの也〇徒然ゟ云くろみゞかし
以ゟ膳棚のすゝけ〳〵いふ云れ黒柳もくろぞかして基
不ゟてすけるゟ故に字彙ゟ夜間ハ板為之所以藏食物也
とゝ

くろうす　黒船の蛮南蛮人の船とゝ西洋歐羅巴の地方
波羅多伽兒（ホラトガル）より官人と臥亜（ヲランダ）とゝ臥亜より西馬港と兼
帯して治せる而の船せしを○兼安中に番船如夜叉脇下出火
焼禾而逃とゝ見えたる火術の我邦に来りし始なるべし
くろうせ　倭名鈔曲調部に崑崙八仙とあり崑崙国と
掘倫国ともいへり音通ずべし　平群朝臣廣成漂流して
崑崙国に至りし事後日本紀に曲江集玄宗勅書に八
林邑国とゝ又延暦中に有二人乗小船漂至于参河国以布覆
肩著犢鼻禿袴左肩著紺布形似袈裟年可二十身長五尺五分耳
長三寸餘唐人見之曰是崑崙国人也と類聚国史に○塩
嚢抄に悉くゝいてゝの代崑崙とゝ呑東
のなまりなり
くろめる　倍と求と抄に居くろめるとゝ古事記
に見えたる天之新巣之凝烟之八拳垂氏焼舉のこと有て

めてくろめる也
くろがい　蜻蛉日記にくろがいのかゝりたるものとひかけ
たるきてとゝ見えたる後に黒がいの九つあるを紙にうた
ゝ書しと見えたる物の名なるべし黒栫は本朝式に知る如く西宮
記に参議以上黒栫机とゝ見えたり高々秘苑に鵝鶏木とゝ見
也とゝいふ漢語抄には栫心と訓せり葡萄栫に多しとゝ
くろもか　鶴の骨に白塩と入て黒焼にして以て血暈金
創の乳絶に妙也
くろさう　黒坂也紙中に見たる義仲の陣せし所也
くろぎのや　黒木の屋也仁徳天皇の宮殿とせりとゝ
それ〳〵新千載集に後深院の御位のとき黒木の屋へひひ
ゆゝしもとゝ小侍ひもとゝ黒木の御所もとゝ見えたり万葉集に
たゝなはる沢尾が道葦黒木もて造れる家はいとゝ
又黒木侍所吉野郡黒渕村小なる後村上帝の皇居とゝ

くろものゝ　古事記に黒樔橋とゝ也玉木の丸太とす
波〳〵其中ふ栄薪と挾みて造ることゝ今も山川に多〳〵
くらめりのたち　諒闇の時〳〵ふ装束元文柄ハ白鮫皮の
〇白鍍剱亦同〳〵　山事に用〳〵
くろみどりれる波　倭名抄ふ青驪馬とあり鉄駘馬
ゝも後世りゝ青黒なるゝ又墨の色なり駱とあり〇釘
ゝ驪とあるつげる波とあり林氏ハくろひでりとあり
△くゝゝゝ　掛搭とあり行脚の僧学問のたゝ〳〵来ることゝ
くゝたい　過怠とあり今りゝハ過怠にして贖物と出
ものおとのつ　懐紙の音也和歌連歌の懐紙ふとゝろ紙よ
くゝい〳〵　り起きるとゝろ和歌詠進の時ハ大鷹檀紙に糊おる紙ふ〳〵
高官ハ官姓名前官ハ位姓名也〇世に切目の懐紙とゝりゝハ後多抵

院熊野行幸の時ふ切目王子とゝれ法座の懐紙なりとゝり
くゝゝゝ　瓦燈とあり居宅に瓦燈口とゝりゝも其形の似たる
也〇京ゝゝゝの蜻蛉とゝゝるかげろう瓦名とあり加もろかゝる姫のこと
とゝゝゝゝ
くゝゝきゝ　任華の詩ふ火急将書憑驛使とゝゝゝり〇性
ふりゝハ後漢書に果急とゝゝゝり
くゝゝゝ　火鉢とりゝハ火舎とゝゝ新猿楽記に又西りと内
典に出仁王會の時公卿侍臣行香殿上六位一人捧火蛇隨後とゝゝ
ゝゝゝ待中群要ふ又西〇俗ふ悪心の老婆とゝゝ因果經に今身
作後母謂慈前母兒者死墮黒火車地獄中とゝゝゝゝ女つき
ゝゝ伺也老媼とゝゝも或説ふ花車とゝゝ花とまハもゝ
玄花ハ遊女とゝゝ〇木襲とゝ人と葬るゝ七ゝとゝゝゝとゝゝ
火車の炎ゝゝ本草に罔両好食亡者肝とゝゝゝ也
ゝゝゝゝ　過料の字東鑑ふゝゝゝ

ちちひん　花瓶の字遵生八牋に見えたり○小花瓶に觚

觶の字多し

ちちちり　果報ちちり因果報應の義也五雜俎に果報と

圖るの念とりて佛と学ひ八成佛の日かりん佛と号ふ去八惠眼と

りりく入る対八易しといつて諺に小智八菩提の妨といへも成と也

ぐさちり　瓦落離の音なるべし

くさんも　鏈子ちちり煮茶鏈居家必用に見えたり畿内

西国ハ呼て江戸ハ以茶釜也○車國に呼八羽ハ一つ多と加へ四多と

あられちんちちちり也

くさちてい　皇帝破陣樂也亦名武德太平樂唐太宗製作也

くさおゆ　勸修寺也其村に宮道明神まん式宇治郡山

科神社二座とかる也

くさんぐく　関白ちちり漢霍光伝ハ起ちり陽成天皇の朝

基経公ちり始る○かりく関白といひ誹れちぐ乃多紙に見え

たり○藤氏の外に任ちるハ豊臣公なりとりて玖山公の議

あるちり武備志も即藤氏其兼政者曰関白と見えたり

くさおやく　歎ハ官位と爵或ハ訴訟ちるこの状也

○過状の字ちり過状怠状と分ちり○官掌のちみ人也

くさんどゆ　源氏ちちり東鑑に献巻數と見る釈氏ちり

起りて今神家ちる用ひられ○貫首ハ藏人の頭也辨ちて

第ちと頭の辨といひ中將ちと第ちと頭の中將といひての二人と

両貫首といひ也されと内裡式新嘗會式に授貫首人注に不論

尊卑授小齋第一人也と見えて内ハ九てのち頭ちちると

以祖也又山門の座主と貫主と孫ちり孔氏孝経序に

夫子貫首弟子と見る

くさんぐく　名目抄に管国と見えて西海ちといちり

くさんとつ　元亀元年南蛮船始て肥前に長崎入津に依

あと市やちと中に移ちり町家に換物商人かしちり或ハ華

物の字なりともいふ

くるまちや　火長也撿非違使に属する名也

くるんくる　伊豫の国にいへ禎空の字なりとぞ

くるとも　詩歌にもふいふ廻文也庭訓往来に輪廻と

くるいぶん

いろ　古言

むしくされくされ名ぞ　おのれよりもなのそこよりなん

除夜に用ふる長き歌の言ハ心得ぬし

ぐるぐるぐん　俗語也外聞の音或ハ髄面と譯せり

くるいせき　茶人の客とはして茶をおこし飲食と出せる

椿石とりハ蘇東坡の佛印禅師に點心せんとて椿石と供せ

しよりれり香雪庵の椿石供といふるもの奇石のなれ香くせ

ず○徐献忠ら水品に暑中取浄子石壘盆盂以清泉養と云此

殆泉石供也と見えたり

くるつけい　活計ハりくもぐひけるなる紙欲樂なること

太平記も在京の大名流と結んて茶の会を始め日く寄合活

計と見えたり見えたり

くるんがく　勧学也勧学院のすまゐめのやうに見ゆ奥羽の俗ハ

浪世の用と乃ることいふ

くるふく　華餺の義なるし○俗ふいハるる食ハ家也

くるくげん　荒言とかりロに任せくいふ也

くるんどん　勧進の字日本紀にんえ西土ものいふ多く御郎

位ふ就ての文字也さらに今ハ僧法師ら米銭と貪る名目と女

れるハおやし

くるんたい　緩怠の音也くいふ

くるんぐ　印ふ人関防ハ五雑組に西域記に于闐以為

東境之関防也と見えたる関塞防人より起る也

くるんのき　倭名抄に開木とかり史記に関とぞ

又賓退録に門の俗字なるもの演義文に関木とさんと門上にいつる又性理大全乃注に櫟音栓〳〵字彙に櫟開門閉門機也といへる関木の訛也とて栓門にも上栓にもこれなり今貫ぬきと呼ハ訛也

くるいけん　太平記に高師直太刀と赤松円心にたゝかふ人保昌氏かきにも人昔物がたり保昌無嗣とこれ也他姓に伴ふ〳〵

くるんぶつ　灌佛とも浴日本紀に養和七年より始るとこれ

くるんふせん　庭訓に官府宣とこれ関白摂政の詞を文に認むるといへ政事也

くるこちやう　過去帳とも鬼簿也霊簿とも〇韻学大成に槐ハ冥府簿也〳〵とこれ

くるんきゝ　喚鐘〳〵とも字れめ〳〵

くるんおやゝ　勧請の音也神佛に就ていふ〳〵儒典に出

くるさのきゝ　源氏にこれ冠者の名也といふ元服せしこと

辞也元服のはじめも其本人と冠者と称せり平家物がたり辻冠者

〳〵栄枯物がたり青侍町冠者〳〵もこれなり嫡男なる何也郷氏家

範に子弟小冠者〳〵

くるんつかさ　官領ハ殿上人の頭といふて蔵人頭と管領

職事といへ也〇執事と管領といへ鹿苑院殿の時より〳〵

いつる詩に管領上陽春〳〵といふ也凡て将軍の臣にて天

下の柄と執よの平時政より始まりて〳〵後見といひ〳〵中比

より執権〳〵称して京に将軍の代りとして執事の号より後管領

と称して近来いとゆる大老也

くるるるんふ　本草に火鼠の皮とりて獄といへ火浣布と云

又汚則焼て又白くなるやんとす一名あそべすとこれ〳〵らていん

沙也今の紅毛ハナていんふらすみなるこれ〳〵

くるくるつるやく　荒涼と云もさびしきこと又る言の義にいふ韓退之詩に家居率荒涼とあるえ小野岑守が表に比屋無爨炊之烟連戸多荒涼之門とあるえるなり

くるんぜうり　観世縷乃義文明の比式三番目翁の烏帽子のかけ緒と観世こよりと合せて用ひるを式名にいふ

彼家ハ合紙（アハセコヨ）揉（ヨ）しいとをく○観世ろ猿楽ハ将軍義政の時よりあるる

くるとろるん　阿蘭陀の星とてかる器也○五星儀にいふ

両蝕儀あり

くるくるろぢん　黄櫨染也天子が服にいふ

△くるふち　暦家にいふ日會日とも

くるそく　源氏にくるそくがさしてくるそくの定乃義也

くるんたい　勧盃の義也

くるんえい　巻纓乃義也

くるんぞく　眷属の義也

倭訓栞中編巻之六終

国立公文書館
National Archives of Japan